

# フランス革命における バツ男爵とブノワ

小林良彰

- I 革命神話に対する逆流
- II 革命前の財界活動
- III 革命中における王党派的活動
- IV インド会社疑獄事件の黒幕
- V 革命後のバツ男爵とブノワ
- VI 二人の軌跡から読みとれること

## I 革命神話に対する逆流

ここにバツ男爵とブノワの実例を紹介するのは、フランス革命の通説に対する反証を示すためである。恐怖政治は、ジロンド派系のブルジョアジーはもちろんのこと、フイヤン派や王党派に組するものを根こそぎ絶滅させたと、一般的に信じられてきた。こうした見解を表明するときに、日本の研究者によってよく引用されるのは、つぎのマルクスの言葉である。

「あのフランスの恐怖政治の全体は、ブルジョアジーの敵である絶対主義や封建制度や素町人をかたづける平民的なやり方にほかならなかった<sup>1</sup>」。

その結果、革命前からの大ブルジョアジーは消滅し、革命後、中小生産者から19世紀の産業資本家が生長していくのだと、暗黙のうちに理解され

---

1 マルクス「ブルジョアジーと反革命」(『マルクス・エンゲルス全集』6巻, 大月書店, 1961年), 130ページ。K. Marx, *Die Bourgeoisie und die Kontrerevolution*, *Marx Engels Werke*, Band 6, Dietz Verlag Berlin, 1959, p. 107.

ているのが普遍的である。

バツ男爵とブノワ、とくにブノワの実例は、恐怖政治でかたづけられなかった素町人とでもいえよう。彼らは、ジロンド派ですらなく、もっとも反革命的な王党派であった。フランス革命でまっ先に叩かれ、滅んでしまわなければならないはずのものである。

バツ男爵は貴族であるが、ブノワはもっとも保守的なブルジョアに属する。つまり、マルクスの表現によると「絶対主義」の側に分類される「素町人」である。

「素町人」という言葉は意味のとりにくい言葉である。戦前、平野義太郎氏がこの言葉を紹介したときは、「妥協する俗悪素町人」としている。絶対主義に妥協するという意味である。原語は Spießbürgertum で、「徒歩の民兵」、「偏狭、俗物根性」、「武器としては槍だけをもつ市民」をいう。この上に騎兵としての貴族がいたのであるから、平民でありながら貴族にくっついていくだらぬ奴というくらいに受取られる。それは、まさに、平民でありながら王党派になったブノワのような人物にあてはまる。

これが恐怖政治によって片付けられないどころか、かえって革命政府の要人を買収し、腐敗させ、革命の動乱から利益をせしめた。追求されても、警察機構の中に保護者を作っていて逃げまわる。徹底的な追求を要求したロベスピエールのほうが、最終的には敗北して処刑されてしまう。

しかもバツ男爵は、恐怖政治の最中に、巨大な土地を手に入れた。恐怖政治は大土地所有を一掃するどころか、バツ男爵を大地主に再生させたというべきである。こうしたメカニズムのあったことを無視するべきではない。

また、彼らは王党派の反乱を起して、ナポレオンと対立した。革命を終らせたといわれるナポレオンよりも右の線で活動をつづけたのである。そうした行動の延長として、王政の復活とともに、最高の地位を手に入れた。

バッツ男爵の社会的役割はそこで終るが、ブノワは上層ブルジョアジーの列に入り、貴族に昇格した。貴族的ブルジョアの誕生である。しかも、権力の中核に入った。その子は鉄鋼業、炭鉱業、鉄道業の分野で活躍し、19世紀の大工業家となり、フランス産業革命の推進者の一人となった。

フランス革命における王党派的ブルジョアが、恐怖政治で肥りつつ上昇し貴族となり、その子が19世紀の大工業家へ変身していく。こうした事例を直視することが、フランス革命の神話から脱皮するために必要なのである。恐怖政治を、そしてフランス革命全体を、あまり表面的に眺めるのはよくないということの一例である。

## II 革命前の財界活動

### バッツ男爵

バッツ男爵 Baron de Batz はガスコーニュの非常に古く高い家柄の貴族の家に生れ、若くして軍隊に入り、15才で陸軍少尉に任命された。その後スペインの宮廷に入り、スペイン王に仕えたが、革命直前に帰国して陸軍大佐に昇進し、三部会の貴族身分の議員に選出された。<sup>2</sup>

こうした経歴だけから見れば、彼は名門の宮廷貴族であり、しかもスペイン国境近くの貴族として、フランス、スペイン両王国の宮廷に出入りできる国際的な貴族であった。

しかし、それだけではなかった。彼は当時の貴族にはめずらしく活動的であり、しかも実業界で手腕を振ることのできる才能をもっていた。その結果として、すでにフランス革命の1年前、投機によってインド会社の株のかなりの量を持ち、銀行家ドレッセル Delessert に対して当座勘定を

2 G. Lenotre, *Un conspirateur royaliste pendant la Terreur, Le Baron de Batz 1792-1795*, Paris, 1896, pp. 17-19.

持っていた。<sup>3</sup>

フランス革命の直前、いくつかの株式会社が設立されて活動した。当時、ほとんどの企業が個人企業あるいは数人の合資会社であり、株式会社の形態は特別に大きな企業だけに採用された。しかも、通常一業種に一つであり、いわば独占的企業であった。このうち、生命保険の業務を独占するべき王立生命保険会社が設立されることになった。

この会社設立の指導権をめぐるブルジョアジーの分派が激しく争った。そのとき、バツ男爵はジュネーヴ出身の銀行家グループ、ドレッセル、クラヴィエール Clavière、グルニユス Grenus の側につき、400万リーブルの投資を約束し、このグループが経営権をにぎるために奔走した。<sup>4</sup>この時代は、まだ貴族社会であったから、銀行家や大商人といえども、直接政府と接衝できず、名門貴族の仲介者を必要としたのである。バツ男爵は経済問題に明るい宮廷貴族として、すでに財界世話役のような活動をはじめていた。

## ブノワ

ピエール・ヴァンサン・ブノワ Pierre Vincent Benoist はアンジエ Anger 裁判管区の裁判官の息子として、父のあとを継ぐ立場に生れた。しかし、彼は弁護士、公証人、銀行家となり、三部会招集とともに第三身分代議員になった。議会では控え目な役割に甘んじていたが、財政問題に明るく、政治家兼銀行家の立場で、株式取引を行う者に対して相談のり、誰よりも適切な指導を与えることができるようになった。<sup>5</sup>バツ男爵とはとくに親しく、金融操作について、バツ男爵はブノワに相談を好んでも

3 *Ibid.*, p. 125.

4 J. Bouchary, *Les manieuvres d'argents à Paris à la fin du XVIII<sup>e</sup> siècle*, t. I, Paris, 1939, p. 93.

5 H. Houben, *Finance et politique sous la Terreur, La liquidation de la Compagnie des Indes 1793-1794*, Paris, 1949, pp. 44-45.

ちかけ、その操作をまかせた。<sup>6</sup>

### III 革命中における王党派の活動

#### 国王救出作戦

バッツ男爵は国民議会の議員としては目立った活動をしていない。1790年7月、財政問題について報告したが、彼は王党派の立場から財政委員会の改革案に反対した。この年の9月アシアの増発が問題になったときに、彼は反対を唱えた。またこのとき彼は、経済政策として最高価格制に近いものを提案したらしく、のち、サン・ジュスト Saint-Just が、バッツ男爵を最高価格制の推進者として名をあげている。<sup>7</sup>

王党派貴族が「恐怖政治の政策「最高価格制」を口にしたのは奇妙なようにも思われるが、革命で権力をにぎったブルジョアジーの活動に制限を加えようとする限りで、王党派も、恐怖政治の側と一致点をもつと考えるならば、右と左の偶然の一致と見なすことができよう。これは、歴史の中でよく見られることである。

1791年9月30日、国民議会解散とともに、議員の資格を失い、1792年の初め亡命して亡命貴族の軍隊に加わり、ナッソー公爵の副官になった。しかし、彼は活動的な性格であったのに、亡命貴族達は不活発であったから、居心地が悪くなり、そこからも離れた。

1792年6月20日、パリの群衆がチュイルリー宮殿に侵入するという事件がおきた。これは、その直前にジロンド派内閣が罷免され、フィヤン派内閣が成立したことに對する抗議の運動であった。この事件は失敗に終わったが、バッツ男爵は国王の身の上を心配して、7月1日パリに帰ってきた。

6 *Ibid.*, p. 46.

7 G. Lenotre, *op. cit.*, p. 19.

ルイ16世にも秘密のうちに面会した。ルイ16世は「バツ氏の帰国と完全な行為」と書いた。<sup>8</sup>

8月10日の武装蜂起のときはイギリスに渡っていたらしいが、国王の裁判がはじまると、国王一族の救出計画に奔走した。ルイ16世の処刑を阻止するため、500人の王党派を動員して救出しようと試みた。しかし、彼らは憲兵によって阻止され、バツ男爵は処刑場近くで空しく待つだけであった。処刑を阻止できないとわかると、彼は「王を救え！」と叫んで走り去った。一味のうち二人は捕えられ殺されたが、バツ男爵は消え去った。<sup>9</sup>

### 王妃救出作戦と反革命テロ事件

つぎに王妃救出作戦をはじめた。彼は厳重な監視をくぐってタンブル監獄に入り、王妃に面会し通信の方法をつくった。彼はルベルチエ区の監視隊司令官を自分の腹心にしていて、その友人がタンブル監獄の当番にあたったとき王妃の救出を決行するはずであったが、これも失敗した。<sup>10</sup>

1794年5月23日(プレリアル4日)、公安委員コー・デルボワ Collot-d'Elbois は自宅で二発のピストルを撃たれたが、危くまぬがれた。暗殺者アンリ・ラドミラル Henri Ladmiral は尋問されると、ロベスピエール暗殺が本来の目的であったと自白した。この人物はバツ男爵の代理人ルッセル Rousset の親友であった。<sup>11</sup>

革命政府の側はバツ男爵だけがこの計画の容疑者だと考え、彼に対する追求が行われた。バツ男爵の首に懸賞金がかげられた。しかし、被告人を寝返らせて情報をとろうとしても成功しなかった。<sup>12</sup>

### 運動資金

8 *Ibid.*, p. 20.

9 *Ibid.*, pp. 6-14.

10 H. Houben, *op. cit.*, p. 53.

11 A. Ollivier, *Saint-Just et la force des choses*, Paris, 1954, p. 437.

12 H. Houben, *op. cit.*, p. 56.

革命政府にとっては、バツ男爵は神秘的な反革命運動家であった。彼が逮捕をのがれるのに成功したのは、偶然の幸運も作用したが、莫大な資金を動かし、多くの献身的な協力者をもっていたことによる。そのうえ、革命政府の中に支持者、協力者をもっていたことも幸いした。

彼の動かした資金の大きさを想像するものとして、一つの実例をあげることができる。バツ男爵の秘書デヴォー Devaux の手紙の中に、バツ男爵がオランダの銀行家ファンデンイヴェル Vandeniver と取引をして、そこに21万6,000 リーヴルを預けていたことが書かれている。また、株式仲買人オリー・ラ・ロシュ Orry La Roche に約111万リーヴルをアジアで払込まなければならないこと、バツ男爵の資金はロンドン、アムステルダム、マドリッドに分散されていて、合計すればアジアで、6〜7百万リーヴルになるとも書かれている。また、当時、アジアの価格が下落して、金属貨幣は流通面から姿を消して、きわめて品薄になり、価格が高くなっていたが、そうしたときに金貨を多量にもっていた<sup>13</sup>。

もっとも、この資金のうちどれだけが彼個人のもので、どれだけが国王その他から受取った運動費であるか、または亡命貴族や銀行家から委託されたものかはよくわからない。

#### 保安委員会内部の王党派

革命政府内部とのつながりは、つぎのインド会社事件で明白になるが、その前に、保安委員会内部との関係について見ておきたい。保安委員会は、警察権の最高機関として、公安委員会からは独立した権限をもっていた。当然バツ男爵を探し、逮捕する役目をもっていた。

その中で、バツ男爵の捜査を担当した官吏はドソンヴィル Dossonville であった。ところが、このドソンヴィルの果たした役割が、きわめて

13 Lenotre, *op. cit.*, p. 119.

あいまいなものであった。彼はもと貴族の下僕で、のちパリの飲食店主となり、自分の属する区で大きな影響力をもった。彼はラファイエットの崇拜者として知られていて、テルミドール8日すなわち、ロベスピエール派の失脚の前日、彼のカフェが穏和派の集合場所となり、彼自身もラファイエット派だという告発が行われた。ロベスピエールは保安委員会を攻撃したとき、「王党派の老教授」といったが、これがドソンヴィルを意味していると誰もが思ったほどである。<sup>14</sup>

ドソンヴィルは、当時の革命政府における右派であったと考えてよい。のち、一時逮捕されるが、釈放されると秘密警察員となり、同時に王党派の密偵となった。王政が復活すると、その功績を買われて、パリ警察委員会の委員に任命された。

このように後年になって王党派であったことが明らかになった者が、恐怖政治のときに保安委員会の高級官僚となり、バツ男爵の捜査を担当していたのである。これでは追求ははかどらず、悪く解釈すると、バツ男爵とドソンヴィルは相通じていたとも考えられる。少くとも、二人は同じ路線を歩いていた。

#### バツ男爵対ナポレオンの対決

ヴァンデミエール13日（1795年10月3日）王党派がパリで反乱を起し、議會を襲撃した。混乱に陥った政府の依頼をうけて、ナポレオン・ボナパルトが軍の実権をにぎり、この反乱を鎮圧したのだが、この王党派反乱でバツ男爵がもっとも大きな役割を演じた。反乱の中心はルペルチエ区で、彼はここに多数の献身的な友人をもっていた。ヴァンデミエールの変は、つきつめていえば、バツ男爵対ナポレオンの対決ということになる。

この運動が失敗すると逃亡した。のちに、昔の同志クロツツ Klotz に

14 A. Ording, *Le Bureau de Police du Comité du Salut public*, Oslo, 1930, pp. 106-107.



会い、裏切られて捕えられた。しかし、議会での裁判を要求し、彼にかかわり合いのあったことを暴露するとい<sup>15</sup>った。議員の多くがこの公開裁判を恐れたため、バツ男爵は釈放された。憲兵の監視のみにとどめられたがこれも解かれ、自由になった。

彼自身の釈放に成功しただけではない。彼は恐怖政治のとき逮捕された愛人グランメゾン Grandmaison の釈放にも努力し、1794年1月に釈放させた。この頃が恐怖政治の最中であったことを思うと、バツ男爵の影響力の強さを示すものである。

### 土地革命への逆行

1793年12月末、彼は南仏ピュイ・ド・ドーム県のシャディユー Chadiou の土地を買うことにきめた。これをスイスの時計師ナティー Nathey が53万リーヴルで手に入れたが、自分が名義人であることを表明した。のちにバツ男爵のものであることが明らかになり、彼はここに住んだ。またナティーはバツ男爵の銀器も預<sup>16</sup>っていた。

恐怖政治のさなか、もっとも戦闘的な王党派貴族が逃げまわり、これを追跡する警察の指揮者が王党派であるために要領を得ず、ついにはその愛人までが釈放されてしまう。また、一般的に大土地所有者が消滅させられたと信じられている恐怖政治の最盛期に、バツ男爵が巨大な土地を手に入れた。当時の労働者や職人の日給が高いもので20リーヴル、低いもので3リーヴル前後であったことから見ても、その金額の巨大さがわかる。

要するに、土地革命が進行しつつあると思われるに、まさにその時期に、バツ男爵は巨大地主になることに成功したのである。これを孤立した現象として、一笑にすることができるかどうか。そうではなくて、フランス革命は革命的だといっても、このような逆流もまた含んでおり、その

15 G. Lenotre, *op. cit.*, pp. 378-383.

16 *Ibid.*, pp. 219-220.

ために多くの貴族、上層ブルジョアが生き残り、また、革命が終わってみると、大地主の存在は相かわらず続いたのである。バツ男爵の実例は、そうした逆流の見本とみなすことができる。

### ブノワの政商的行動

ブノワはバツ男爵と協力しながら、独自の行動もつづけた。1792年には、デュムーリエ将軍 Dumouriez によって敵国プロシアの情報を探るためにベルリンに派遣された。ドゥー・ポン公爵（ライン宮中伯爵）の公使館書記という名目であった。ベルリンで数日滞在したが、反革命的言動をして、デュムーリエの期待に応えなかった。同じ年の9月イギリスへも行ったが、ここでも王党派のために働いた。<sup>17</sup>

それでいながらダントンの友人でもあり、ダントンが外相になったとき、外交的事務をまかされた。<sup>18</sup>つまり、ブノワは骨の髄まで王党派であったのに、革命政府の要人はブノワの才覚を頼りにして、彼を使った。ブノワは革命政府に使われながら、その裏で王党派のために働いていたことになる。

## IV インド会社疑獄事件の黒幕

### バツ男爵の表と裏

バツ男爵は、フランス革命をつうじて、もっとも首尾一貫した王党派の活動家であった。いわば、反革命の英雄であった。しかし、そのわりには、王党派の中で崇拜されていない。むしろ、ヴァンデーの反革命戦争を率いて倒れたラ・ロシュジャックラン侯爵 La Rochejaquelin のほうが、伝説的な名声を保っている。その理由はなにかと考えると、バツ男爵の

17 P. Caron, *Les missions du Conseil exécutif provisoire et de la Commune de Paris dans l'Est et de le Nord, Août-Novembre 1792*, Paris, 1953, p. 218.

18 A.Mathiez, *La conspiration de l'étranger*, Paris, 1918, p. 50.

もう一つの顔にいきつくのである。

彼は二つの顔をもっていた。今まで見てきた顔とは、たとえ巨額の運動資金を動かしていたとしても、ともかく、危険をかえりみずに国王一家の救出運動に献身したという、いわば戦士、正義漢としての一面である。それは、自己犠牲の精神にもとづくものであり、反革命は反革命なりに評価されるべきものであった。

ところがもう一つの顔があった。これは投機業者としての側面、疑獄事件の黒幕といった性質の側面である。

その意味では、バツ男爵は不可解な人物である。王妃救出のために命がけの陰謀をたくらみながら、それと並行して、もうけるための陰謀を、革命政府を相手に企てたのだから。後者の陰謀が、インド会社事件と呼ばれる疑獄事件であった。この事件そのものについては、すでにくわしく紹介したことがあったので<sup>19</sup>、ここでもう一度くり返すことは避けることにして、この陰謀の中でのバツ男爵とブノワの行動だけに焦点をあててみよう。

### インド会社の危機

インド会社はケープタウン以東の貿易を独占する特権会社であり、巨大な資産をもつ株式会社であった。この会社の株は、株式市場で、革命の騒乱にもかかわらず高値を維持していた。ジロンド派内閣のとき、この株に対して有価証券移転税が新設された。しかし、会社側は巧妙な方法で脱税をおこなっていた。

当時の大蔵大臣クラヴィエールは銀行家であり、バツ男爵の親友であった。両者は、革命前から生命保険会社の設立について協力関係にあった。そしてバツ男爵は、インド会社の株主だというつながりがあった。そ

19 小林良彰「フランスにおけるインド会社の成立と清算」『同志社商学』第20巻第3・4号, 1968年, 194-202ページ。

のうえ、ジロンド派幹部が、インド会社理事の邸宅に出入りしていたという関係もあった。そうしたこともあって、ジロンド派政権はインド会社の不正を追求しなかった。

1793年6月2日ジロンド派が追放されることにも、インド会社の不正を摘発するピラが出された。インド会社理事は、何らかの制裁手段がとられることを覚悟して、その対策をバツ男爵に相談した。ここから、バツ男爵の陰謀がはじまった。

### 腐敗した革命家たち

この年の8月バツ男爵のシャロンヌの別荘で、数人の客が招待された。国民公会議員ではシャボ Chabot, バジール Basire, ジュリアン (ツールーズ出身) Julien, ドローネ (アンジエ出身) Delaunay がいた。いづれも、モンタニヤールに属する革命家であった。これに文学者のラ・アルプ La Harp, 銀行家のブノワと同じく銀行家デュロワ Duroy が加わった。二人の貴婦人ジャンソン侯爵夫人 Janson, ボーフォール伯爵夫人 Beaufort<sup>20</sup> も参加した。

ジャンソン侯爵夫人は王妃の救出に力を尽した王党派貴婦人であった。シャボは僧侶あがりの革命家で、立法議会ではバジール, メルラン (チオンヴィル出身) とともにコルドリエクラブ三人組をつくって最左翼を形成し、王制の転覆、国王の処刑に積極的な役割を果し、革命的な名声を高めた。国民公会ではモンタニヤールに属し、保安委員会に入り、この指導権をにぎり、一時はダントン, ロベスピエールと同じくらいの影響力をもっていた。しかし、権力をにぎると腐敗の速度も早く、オーストリアからきた銀行家フライ Frey の仲間になり、その妹と結婚し、莫大な持参金を受け取った。「昼のサンキュロット、夜の粋な王党派」といわれた。

20 H. Houben, *op. cit.*, p. 164.

ドローネ (アンジェ出身) も当時の保安委員会の有力者であった。銀行家ブノワもアンジェ出身であったから、同郷の友人の関係にあり、ブノワの紹介でドローネはバツ男爵と知り合い、バツ男爵の株式取引、銀行業についての才能を尊敬するようになった。<sup>21</sup>

バジールは1792年8月10日の武装蜂起に大きな役割を果し、保安委員会の有力者になった。シャボの親友であった。

ジュリアンは保安委員会のメンバーであり、また各地の派遣委員として活躍し、当時の有力な実業家議員として知られていた。

### 手のこんだあくどい陰謀

この陰謀家達の計画は、二つの方向にむけられた。まず、インド会社に対する攻撃を先どりして行い、その功績の上に立って政府委員の中に入りこみ、地位を利用して、結果的にインド会社に有利な方向に問題を解決することである。もう一つの側面とは、この機会を利用して、インド会社を喰いものにして、私腹をこやそうとするものであった。

7月9日、まずドローネが、インド会社を含めたすべての株式会社 (当時は金融会社と呼ばれていた) を攻撃する有名な演説を国民公会で行った。しかし、その一週間後、罰則として、強制公債を割り当てることを提案した。<sup>22</sup>彼のやり方は、まず激しい攻撃を国民公会で行い、この道の専門家であると思わせ、そのあとで、会社側に対する寛大な罰則を提案して、それ以上の攻撃を封じることが意図していた。その意味では、インド会社のために働いてやったといえる。ところがもう一つの裏があった。

ドローネはシャボにいった。「私の提案はインド会社理事と株主に恐怖を起させ、そのため株価を下げることになるだろう。そのとき、ブノワと

21 *Ibid.*, p. 46.

22 H. Houben, *op. cit.*, p. 153.

バツが安く買うだろう<sup>23</sup>。これは、彼らがインド会社に不安を与え、株価の安くなったところで買占め、そのあと寛大な処置を実現させて、株価の回復を待つという、いわば会社を喰い物にする作戦であった。

### 陰謀家で固めた委員会

8月25日、今度はジュリアンが国民公会で演説し、インド会社理事が反革命のために巨額の資金を国王に貸したと告発した。ただし、これは事実無根のことであった。しかしこの告発の威力で、彼もインド会社問題の専門家として認められた。当時の国民公会は、まだ召集されてから約一年しか経過しておらず、約700人の議員はお互いに誰がどのような立場で、どのような能力を持つかわかっていない。そこで、人の知らない事実をもち出して雄弁を振えば、すぐにその道の専門家にされたのである。

さて、インド会社を含めた株式会社の問題を審議するため、「財政問題小委員会」Commission des Finances が組織された。ここにドロネ、ジュリアン、シャボ、ラメル Ramel、カンボン Cambon、ファーブル・デグランチヌ Fabre d'Églantine が入った。6人の委員のうち、半数がバツ男爵の側であった。

ジュリアンとブノワはインド会社理事を脅迫するとともに、便宜をとり計らってやると約束して、50万リーヴル以上の金をまきあげた<sup>24</sup>。

しかし、インド会社に対するより激しい攻撃がファーブル・デグランチヌの側から出されたため、バツ男爵の計画どおりには進まず、ついにインド会社は清算されてしまうことになった。争点は清算の条件に移ったが、インド会社に有利な方法を主張するバツ男爵の側と、政府の厳重な監視のものとの清算を主張するファーブル・デグランチヌが対立した。

バツ男爵のグループは、ファーブルを買収しようと考え、この仲介者

23 G. Lenotre, *op. cit.*, p. 124.

24 H. Houben, *op. cit.*, p. 163.

にシャボが立った。結局、シャボはファーブルに原案を読まずにサインさせ、そのあとドローネとブノワがインド会社理事の要望を入れて修正し、これを政府案にすることに成功した。<sup>25</sup>

### 黒幕は逃げた

しかし、インド会社をめぐる汚職事件の進行は人々の疑惑を深めつつあった。その他の行為についても、シャボ、バジール、ドローネはジャコバンクラブで非難されはじめた。その結果、9月14日彼らは保安委員会から罷免された。

すると、シャボとバジールは先手を打って、バッツ男爵の陰謀を告発する側にまわった。シャボは「明日夜8時、ブノワ、ドローネ、ジュリアン、バジール、バッツが自分の家に来るから、共に逮捕してもらいたい」と申出て、自分を救おうとした。しかし、シャボの帰った後、保安委員会の誰か、あるいはスパイの誰かが、この裏切をバッツ男爵に告げた。そこで、ブノワ、バッツ、ジュリアンは逃亡した。<sup>26</sup>

バッツ男爵は南フランスへ逃げ、ブノワはスイスへ逃げて恐怖政治が終ってから帰国した。こうして、黒幕の大物は逃亡したが、議員のシャボ、バジール、ドローネは逮捕され、腐敗議員として処刑された。

こうした状態の下でも、まだ保安委員会にはバッツ男爵とブノワを保護しようとする傾向が残っていた。保安委員会を代表してインド会社事件の結末を国民公会に報告したアマール Amar は、この事件の責任を逮捕された議員だけになすりにけようとし、バッツとブノワのスペリングまで変えて報告した。これに対して、ロベスピエールが「もっとも重要なことを忘れている」と批判した。アマールは答えずに報告を撤回した。<sup>27</sup>

25 *Ibid.*, pp. 175-195.

26 G. Lenotre, *op. cit.*, p. 176.

27 *Ibid.*, p. 216.

## V 革命後のバッツ男爵とブノワ

### バッツ男爵の昇進と死

王政が復活すると、バッツ男爵は王党派的活動の功績を評価されて、1815年11月元師、カンタル県司令官に任命された。軍人としては最高の地位を得たのである。しかし1818年、この地位を去り、革命中に入れたシャデユの土地に引退し、ここで1822年に死んだ。彼の下農民は、彼の厳格さを恐れていて、彼の死を信じず、棺を見てもなおそれをつくりごとと主張したという。彼が農民に厳しかったため、農民は彼を「泥棒」と呼んでいたともいう。また、彼の死は脳卒中によるものだといわれるが、別の説では、国王から彼の悪業を追求されそうになったので、自殺したともいわれる。<sup>28</sup> 最後まで、謎につつまれた生涯であった。

### ブノワの社会的成功

ブノワは革命の時期を通じて、政商的活動が目立っていた。しかも、政府にべったりとくっついた政商ではなく、つねに二面性をもち、革命政府と反革命の両方に足をかけて資産を増やした。

また、革命のさなか、1793年3月12日、ナントの大船主ルルー Leroulx の娘と結婚した。この二人の間に生れたドニ・ブノワ Denis Benoist から19世紀の上層ブルジョアジーの家系がはじまる。

さしあたり総裁政府の時代、ブノワは控え目にして、王党派の仲間をつくっていた。ナポレオンが登場すると、ブノワは内務省の通信局長になったが、ナポレオンにはあまり優遇されなかった。

ブルボン王朝の復活とともに、彼の幸運が訪れた。国王の顧問官、直接税徴収局総監となり、翌年議員となり、1816年には貴族に列せられて伯爵

28 H. Houben, *op. cit.*, p. 57. G. Lenotre, *op. cit.*, p. 390.



となった。党派ではウルトラ（極端王党）に属し、シャルル10世が即位すると大臣になった。7月革命でシャルル10世は追放されたが、ブノワの身の上には問題がなく、1834年富と名誉に埋もれて死んだといわれている。<sup>29</sup>

### 大工業家になったブノワ家

彼の息子ドニ・ブノワは、ブリエール・ダジ Brière d'Azy の娘と結婚し、ドニ・ブノワ・ダジと名乗った。ブリエール・ダジはニヴェルネ地方（パリの東南）で、いくつかの鉄工所を経営していた大工場所有者であった。1841年に死んだとき、250万フランの財産を残したというから、大財産家とみてよい。<sup>30</sup>

ドニ・ブノワ・ダジは1835年から、パリの銀行家ドルイヤール Drouillard と結んで、アレ鉄工所 Forges d'Alais を賃借する会社をつくった。この二人は、1838年ニヴェルネの工業家と結んで、アリエ盆地 le bassin de l'Allier の炭鉱と金属工業を経営する会社を設立し、ビオル Biolles とマレ Marais の石炭採掘権を獲得し、モンリュソン Montluçon に溶鉱炉を建設した。<sup>31</sup>

1840年には、ドニ・ブノワ・ダジはP・Oグループ（パリ・オルレアン鉄道会社）の中のオルレアン会社 Compagnie d'Orléan の重役に名をつらねている。<sup>32</sup>

1846年、多くの銀行家、工業家が集ってケース・ボードン Caisse Baudon（中央商業鉄道金庫 Caisse Centrale du Commerce et des Chemins de fer）を2,500万フランの資本金で設立したが、この経営のトップに、貴

29 G. Lenotre, *op. cit.*, p. 49.

30 G. Thuillier, *Aspects de l'économie nivernaise au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1966, p. 22.

31 B. Gille, *Recherches sur la formation de la grande entreprise capitaliste*, Paris, 1959, p. 115.

32 *Ibid.*, p. 116.

族のガイエラ公爵 Galliera, 銀行家ペリエ Périer とならんで, P Oグループからバルトロニー Bartholony とともにドニ・ブノワ・ダジが入っている。<sup>33</sup>

1845年ロワール炭鉱会社 Compagnie des Mines de la Loire が組織された。これは中南部フランスにおける炭鉱業の独占を非難されるほどの大炭鉱会社であったが、この会社の重役にも彼が入っていて、翌年には議会で、この会社のための弁護を行っている。<sup>34</sup>

ドニ・ブノワ・ダジの息子ポール・ブノワ・ダジはのちに、大鉄鋼会社コマントリー・フルシャンボー Société Commentry-Fourchambault の経営者になった。<sup>35</sup>

## VI 二人の軌跡から読みとれること

バツ男爵とブノワの実例は、たしかに一つだけの例に過ぎないけれども、決して孤立した現象として片付けるわけにはいかない。孤立したというには、あまりにも影響した範囲が広すぎる。恐怖政治のさなかに、警察機構のトップに立つ4人の議員を腐敗させ、実利を手にし、発覚しても、なおかつまだ保安委員会に保護者を持った。二人を基準にして革命政府を眺めるならば、当時の革命政府は二人を保護する側と、二人を叩こうとする側に分裂していたということが出来る。恐怖政治の権力は、決して一体であったというわけではない。

また、ある党派が敗北したからといって、その党派の支持者が全滅する

33 *Ibid.*, p. 121.

34 P. Guillaume, *La Compagnie des mines de la Loire 1846-1854*, Paris, 1966, p. 198.

35 小林良彰「フランスにおけるイギリス式鉄鋼業の導入——フルシャンボー会社の場合——」『同志社商学』第25巻第3号 1973年, 52ページ。

わけではない。王党派が敗れ、ジロンド派が敗れても、バツ男爵やブノワの経済的活動がつづき、その中で利益をあげている。革命政府の要人も切り崩した。また、巨大地主への再生という信じられないようなことを起している。

同じことは7月革命でもいえる。この事件で国王シャルル10世は打倒された。しかし、王党派のブルジョアであったブノワの身の上には不利なことが起らず、彼は上層ブルジョアの一員として生き残る。結局、国王とともに打倒されたのは宮廷貴族の権力であって、保守的であろうと革命的であろうと、ブルジョアジーには傷がつかなかったのである。そのため、ブノワは、フランス革命をつうじて最終的な勝者として残る。

恐怖政治も法制的には、ブノワのようなものを片付けたはずである。しかし、あくまでも法制的にである。実質的には、片付けるどころではなく、逆に法制そのものが掘り崩されつつあった。したがって、マルクスのいう「片付ける」を、文字通り、社会的存在の消滅と受取ってはいけない。

次のマルクスの言葉も、同じようなニュアンスを含んでいて、日本の研究者がよく引用の対象にする。

「第一次フランス革命では、立憲派の支配のあとにジロンドの支配が、ジロンドの支配のあとにジャコバンの支配がつづいた。これらの党はいずれも、自分よりも進歩的な党にささえられていた。どの党も、革命を指導していくうちに、もはや革命のまえに立ってすすむことはおろか、革命のあとについていくことさえできないようになると、たちまち、うしろに立<sup>36</sup>っているもっと大胆な同盟者によって押しのけられ、断頭台に送られる」。

フランス革命についての文章そのものは、正しいとしよう。しかし、「断

36 マルクス「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」(『マルクス・エンゲルス全集』8巻、大月書店、1912年)、128ページ。K. Marx, *Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*, *Marx Engels Werke*, Band 8, Dietz Verlag Berlin, 1959, p. 135.

頭台に送られる」というのは、文学的表現として受けとるべきで、これを自然科学的に受けとめると間違いになる。断頭台に消えたものもいるが、これをかわして、生き残ったものも多い。

マルクスの言葉を四角四面に解釈して、恐怖政治で、立憲派やジロンド派とともに大ブルジョア階級はすべて消し去られたと解釈した人が、日本の研究家、とくに日本史の研究家に多かった。<sup>37</sup>そこで「フランス革命は、あのように革命的であったが、明治維新では三井や住友のような大商業資本が残っているから」というような対比の仕方が一般的になった。

バット男爵とブノワの実例は、フランス革命で「片付けられ」もせず、「断頭台」に消え去りもせずに生き残った王党派的ブルジョアの存在を示すことにより、明治維新との対比の上に新しい証拠を提示ものになろう。

37 たとえば、服部之総氏は、この文章の中にジロンド（大中産業ブルジョア及び商業ブルジョアの党）、ジャコバン（小ブルジョア階級の党）と、自分なりの階級的背影についての解説を加えた。そうすると、ブルジョア階級そのものが絶滅したかのような印象を読者に与えることになる。『服部之総著作集』第4巻「絶対主義論」（マルキシズムにおける絶対主義の概念）、理論社、1955年、25ページ。